

Part 2, Vols 3-6 : Social Life, Second Series

ISBN 4-902708-24-8 C3322 ・ 全4巻セット定価60,000円(税込63,000円)

かつてイギリス文化人達に愛された 有名「リゾート」についての定評ある文献を復刻。

Volume 3 : Alfred Barbeau *Life and Letters at Bath in the Eighteenth Century* (1904)

ISBN 4-902708-25-6 C3322 ・ 360 pp., 32 pl.
16,000円(税込16,800円)

鉱泉に恵まれたバースが、有名リゾートとして開発され、ポーブ、ウォーバートン、フィールディングなど多数の文化人が来訪するなど18世紀を通じて繁栄した様子を詳しく解説。スモレット、オースティン、ディケンズなどの作品の中にも取り上げられている。

Preface, by Austin Dobson • Bath to the Last Years of the Seventeenth Century • The King of Bath: organisation of fashionable life, 1730–1761 • Life at Bath: amusements • Society in Bath: Sheridan's marriage; the Methodists • Authors at Bath: Bath in plays and novels; Sheridan, Smollett, Jane Austen, and Dickens; the "Water Poets"; the Bath-Easton Parnassus; Anstey; Prior Park; its literary guests (Pope, Warburton, Fielding), and other famous visitors • Art and Science: the Woods, Gainsborough, Lawrence, Herschel • The Transformation of Bath in the Nineteenth Century • Index

Volume 4 : Lewis Melville *Bath under Beau Nash* (1907)

ISBN 4-902708-26-4 C3322 ・ 338 pp., 13 pl.
15,000円(税込15,750円)

賭博者であるリチャード・ナッシュが、管理を引受け設備・風儀を改善して華麗な社交場へと変貌させたバース。最も繁栄した頃のバースの様子を、King of Bath と呼ばれ栄華を極めたナッシュの人物像とともに描き出した興味深い資料。

The Early Years of Beau Nash • Bath before the Eighteenth Century • Fashionable Bath before Nash • Richard Nash, M.C. • The Famous Code • The Bath Road • The City of Bath • A Day at Bath under Beau Nash • The Baths • The Company at the Bath: some visitors' impressions; costumes and scandal • At the Tables • The Last Years of Richard Nash • The Character of Richard Nash • Appendices • Index

Volume 5 : Lewis Melville *Brighton: Its History, Its Follies, and Its Fashions* (1909)

ISBN 4-902708-27-2 C3322 ・ 268 pp., 24 pl.
14,000円(税込14,700円)

海水浴による健康増進が上流階級の間で流行した18世紀後半。海辺のリゾートであるブライトンには、英国王室の滞在に伴い、貴族と上流階級の人々が訪問し始めると、たちまち洗練された魅力溢れる街へと変貌。小さな漁村だったブライトンがリゾートとして発展する歴史を克明に解説。後のワイルド、グリーンらの作品の中にも取り上げられており、文学研究にも有益な資料。

Brighton before the Eighteenth Century • The Rise of Brighton, 1700–1782 • The Prince of Wales and the Marine Pavilion • The Company at Brighton: a rake-helly set; private life at the pavilion • The Increasing Popularity of Brighton • The Brighton Road • Sea-Bathing and the Baths • A Day at Brighton: the Master of the Ceremonies' balls and assemblies; minor amusements • Brighton since George IV • Appendices • Index

Volume 6 : Lewis Melville *Society at Royal Tunbridge Wells in the Eighteenth Century – and After* (1912)

ISBN 4-902708-28-0 C3322 ・ 316 pp., 25 pl.
15,000円(税込15,750円)

その発見から400年の歴史を持つ温泉リゾート、ターンブリッジ・ウェルズ。バースと並んで18世紀に上流階級の社交場として発展した様子を詳述した本書は、イギリスの文化研究に欠かせない資料。

The Discovery of the Springs, 1606 • The Development of Tunbridge Wells, 1606–97 • The Company at Tunbridge Wells in the Eighteenth Century • Beau Nash at Tunbridge Wells, and Other Masters of the Ceremonies • An Eighteenth-Century Post-Bag from Tunbridge Wells • A Day at Tunbridge Wells in the Eighteenth Century • Tunbridge Wells since the Eighteenth Century • Appendix

リゾートに秘められた街と人のストーリー

——アティーナ・プレス「イギリス研究基本文献シリーズ」Part IIを推薦する——

原田 範行 (杏林大学教授)

日々の生活や束縛から抜け出し、ちょっとした非日常を楽しみたい——誰しもそんな気持ちになることがある。リゾートはこうして生まれた。イギリスでは、鉱泉に恵まれたバースやターンブリッジ、美しい砂浜が続くブライトンなどである。いずれもロンドンからそう遠くはない。日常に近接しつつ、それを非日常化できる空間、これがリゾートの魅力だ。

日常を非日常化する場合、その方向は二つある。混沌とした無秩序から解放され秩序ある社会で自らの状況をよく整理したいという場合と、逆に、秩序から逸脱して混沌とした社会に身を隠したいという場合だ。リゾートのストーリーは、通常、この両極の振幅のうちに織りなされるようだ。例えばバース。「バースの王」の名を恣にした洒落者リチャード・ナッシュが初めてバースを訪れた1705年、そこは単に鉱泉のみで知られる汚辱の街であった。それを彼は、その才覚によって一代のうちに華麗な社交の場へと変貌させる。だがそれも束の間、ジェイン・オースティンは『説得』(1818)

の中で、零落した貴族サー・ウォルター^{の住処}の住処として、精彩を失ったバースを選ぶのである。ブライトンもそうだ。18世紀後半、皇太子時代のジョージ4世が好んだこのリゾートは19世紀には大いに繁栄した。だが20世紀、グレアム・グリーンが『ブライトン・ロック』(1938)において活写したこの街は、ピンキーが闊歩するギャングの巣窟と化していたのである。

秩序と無秩序を往復するリゾートのこうしたストーリーはまた、様々な人生のオモテとウラを見事に語ってくれる。1728年、実母の冷たい仕打ちに業を煮やした詩人リチャード・サヴェッジは詩集『庶子』を刊行。実母マックルズフィールド伯爵夫人は、「非難を逃れて大急ぎでバースを去り、ロンドンの雑踏に身を隠した」という。文豪サミュエル・ジョンソンの記したこの出来事は、ナッシュの手腕で生まれつつあった秩序あるリゾートが、夫人の汚れた日常にはそぐわぬものであったことを示している。もっとも、非日常的雑踏にリゾートの楽しみを覚える女性もいた。1749年、「ターンブリ

ッジのごたまぜが私は好きなの」と記したのは、社交界の大家モンタギュー夫人である。そして19世紀末、オスカー・ワイルドは喜劇『まじめが肝心』(1895)の中で、主人公ジャックの出生の秘密を、自らもたびたび訪れていたブライトンに埋め込んだ。かつてロンドンのヴィクトリア駅で間違えられ、ブライトン線に乗せられた赤ん坊こそ、ほかならぬジャックだったのである。

リゾートを説明するガイドブックは今日無数に存在する。だが、それらは現況を飾るばかりで、街と人のストーリーを語らない。アティーナ・プレスがあえて20世紀初頭の基本文献を収集した理由はここにある。現況ばかりを追いかけて街と人のヒストリーを知らぬ文化事業や都市開発に限界があるならば、その限界を越える手立てを明示してくれるのがこのシリーズだ。既に大学図書館や研究機関でも閲覧困難なこうした基本文献こそ、今21世紀の私たちに最も必要とされるものではないかと思われる。

